

座談会 日本におけるアカデミズムの哲学史―

『哲学雑誌』と『哲学研究』の比較分析

登壇者・来場者による質疑応答

四名の登壇者による報告に続き、登壇者の間で座談が行われ、登壇者が来場者からの質問を受けた。以下はその記録である。

一 登壇者との対話

上原麻有子「司会」では、座談会に移りたいと思います。今日の四つの提題に基づいて、まず座談者の中で質疑応答を試みたいと思います。鈴木先生、お願いいたします。

鈴木泉 色々な話ができたので順番に整理して質問とか出さないですけれども、まず一つ感想からいきます。これは半ば冗談ですけども、戦後の東大がある種の哲学者たちを輩出したのはどうしてだろうかというのが、こういうことをはじめた一つのきっかけだったのです。それを考えた時に、いわゆる京都学派と東京スタイルといいますが、その関係を正確に語るのには難しいですし、大きな違いはあるけれども、あ

る種の反復性、構造的な反復があるのではないかと。つまり、京都学派、西田や田辺たちがやったこと、ある種の *Seibstdenken* ということや、後はそこにもう一つ入ってくる政治との関わりが、何十年かを経て、ある種の反復があったかのような印象を受けました。つまり、それは『哲学雑誌』だけではないし、しかも東大の教員全てがというわけではないですけれども、例えば、大森荘蔵、黒田亘、それから井上忠、この辺りの人たちは、非常にお互いがお互いを切磋琢磨しながらよく統御していた。西田と田辺に師弟関係があったりとか、上下関係とまでは言わないけれども、田辺の方が西田を慕ったり、西田が田辺を評価したりというのは違う、より水平的な関係ではありますが。しかしそこで、例えば黒田先生なら英国経験論から分析哲学であったし、井上先生は古代哲学、大森先生はウイトゲンシュタインをアメリカから持ってきてといった具合に、分野は違うけれど、「それは、事柄として何だ」ということを、いつも彼らは議論していました。これは、おそらく *Seibstdenken* のまさに体現なわけですが、そういうことが、何十年かを経て東大のある種の教員の間にも共有されたということに、ある種の反復を感じます。まあ政治に関しては、これは大分冗談で、検挙された人というところ前にいるだろうか考えると、本当にいないわけでは、おそらく戦後、助手の前に加藤尚武先生が検挙されたかなと思ったりくらいで、そういう反復があると。しかも、それが東大と

いっても実は一つではないのです。これはたまたま、比較的面白い話なので、少し紹介しておきます。この前、外国からお呼びした方と中島隆博さんとのシンポジウムで聞いた話です。小林康夫さんが、近代日本哲学を紹介するサーベイ論文を英語で書かれていて、その話をして下さった。「戦後の日本哲学を総括する」というような題を与えられて彼が書いたのが、「駒場カルテット」です。「駒場カルテット」は誰かという、井上忠、大森荘蔵、廣松渉、そして坂部恵。僕らからすると、坂部先生は本郷の先生だったので、一瞬しだけむっとして、「本郷の先生だったのになあ」と思ったのです。ですが実は、坂部先生が、彼の一番優れたというか独創的な仕事だと僕が思っている『仮面の解釈学』や『理性の不安』に結実する論文を書いていたのは、駒場の助教授時代の三年かそれくらいの間なのです。だからその間、この四人は一緒に職場にいたのです。それは、小林さんが駒場という、本郷のように黴臭いところでないところで哲学者たちが自由にやっていたということを結局言いたいのですけれども（一同笑い）。しかし、それはやはりある種の意味があります。戦前批評主義、批判主義を掲げながらも、伊藤吉之助先生が一番掲げたように、あくまで原典に即しながら哲学史研究をする。そのような伝統とは外れたところにいらっしやった時が、坂部さんにとつて一番幸福だったのかもしれないし、いい仕事をされた。このようなことを踏まえながら小林康夫さ

んは「駒場カルテット」と名付けた。ある種の本郷の呪縛がどこかにあったからこそ、坂部先生は退職後にまた自由に活動されたという印象があつて、そういうことはあるのだらうなど。また違いもあつて、最後の藤田先生のお話ですが、「濃密さ」ということです。京都に比べると駒場カルテットは、もしかすると、もう少し風通しのいい濃密さであつたかもしれないというのは、単なる印象ですけれども一つ思いましました。後は査読の件です。実は私も上原先生と座談会をしましょうかという話をした時には、勿論これ（『哲学研究』六百号の特集）を読んでいて、そういう方がいいのではないかと話をしたということもあります。これは今回も読ませていただいたて、全部はとも答えられないですが二つあつて、一つは論争というのが『哲学雑誌』の場合はどうだったのかということですが、これは、少なくともある時期まではあつたと思います。「何々に答ふ」という仕方はありましたし、これは必ずしもいわゆる西洋哲学ではなくて、仏教の方法論を巡つてとか、他にも様々な論争がありました。これは、この『哲学雑誌』が、ある種哲学、人文学のアーリーナとして機能していた時期があつた。それは段々消えていくのですけれども。具体的な年代を指定出来ないのは残念で、今後の中でより明確にしていきたいと思えますけれども、おそらく三〇年代により専門的な哲学史論文が出てきて中心となっていく。近世、古代、そして新カント派とかハイデガーを中

心とした実存哲学といったものが紹介されていくに従って論争は消えていくのですが、六〇年代に復活します。その時の論争などは、誰かが仕掛けていたのか、それとも単なる投稿があつたから載せたのかといったことについて、戦前に関してはよくわかりません。ただ、実は一九五〇年代後半くらいから、それまでと少し違つて特集みたいなものが組まれはじめます。ある時期は、特集だけではなく討議という形で特定の二人が同じ論題を論じるという時期がありました。ただ、それは消えていき、特集の論文形式、今の『哲学雑誌』もその形式ですけれどもそういったものになつていく。変わつていくけれども、それは充実していたものもあつた。僕が伝説的だと思つている号がいくつかあつて、この編集者が誰かというの、正確にわからないですけれども、今は、我々、つまり理事が企画を立てて指名するので。査読はしません、つまり査読して落とされるような恥ずかしいものは出してくれないという前提です。それでもたまに落とされる方がいて、その時には中井さんのように正座して待つとかいうこととはなくて、落ちたらおしまいということ。こういう仕方です。別の方の関与があつて、間違つていくかもしれないので固有名詞は挙げませんけれども、加藤尚武先生よりも少し前の世代の助手の方が、かなり頑張つて企画を立てたのではないか。ですから結論としては、戦後の編集に関して散文的な話で、つまり、中井さんや澤瀉先生によ

うに優秀で熱心な編集者が一人いると雑誌は活性化するということの証ではないかと思ひました。もう一つ言いたいことがありましたが、忘れしました。思い出したらまた言います。一旦これで切ります。

納富信留 話が全体的に大きくてどこに注目すれば良いか難しいところですが、最初は、雑誌というテーマに焦点を当てたいと思ひます。というのは、制度の問題と雑誌の問題とは、勿論ある程度連動すると同時に、むしろ相反するところがあると思ひます。例えば東大の場合ですと、研究室は縦割りで、哲学や倫理学という研究室がある一方、哲学科というやや広めの組織の中で細かく分かれていくという制度上の特徴もあるので、今回は雑誌の方だけお話し出来ればと思ひます。これから検討すべき視点ということで、雑誌としては正確さをベースに考えたい。つまり、単純に言つても発行回数とか、先ほど上原先生が引いてくださった頁数とか、どういふことを書くか、発表を載せるのか公募論文を載せるのか、それから読者層です。今は紀要的な感じで発行しているかもしれないけれど、昔は市販されて結構増刷もされて買われていたとか、定期購読するというパターンもあります、そういうことを考えていかなければなりません。

同じ『哲学雑誌』といつても百何十年も経つていたので、そういうことを考えると、ある程度フェーズを分けて、雑誌としての性格を整理するというのが今後私たちの仕事だと思

います。その時に、『哲学研究』が出たことによつて、例えばその時期から役割分担がシフトするといったことがわかると面白いのではないかと思っています。まだ検討していないことを言つてもいけないですけれども。同じ哲学者が、こちらに載せる場合とあちらに載せる場合とで、どういうスタンスの違い、あるいは内容の違いがあるのか。例えば、西田や田辺のような人が議論する場として『哲学雑誌』と『哲学研究』はどうなつていたのかを見ることで、同じものが二つあるのではなく二つの雑誌がそれぞれに色を出して、さらにそれが東京と京都のカラーと連動しているといったことが見えにくると良いと思っています。

というのは、京都の『哲学研究』ができる前には、哲学の雑誌というのは『哲学雑誌』くらいしかない状況でした。皆がそこで出すわけです、田辺とか西田も。それに対して、それでは足りないよと思つて『哲学研究』を作つた時に、当然『哲学雑誌』の方にもある意味で変動がくる、つまり、役割分担が生じるということです。そういうことがどのようになつて、少なくとも初期の段階で、そういうことがどのようになつてきたのかが知りたい。しかも両雑誌とも毎月というペースで出しているというのは、今では信じられないような量産体制です。現在私たちが発行しているような年に一回とか二回というペースの雑誌という発想を変えないと、見えないものがあると思います。逆に言えば、読むのも大変な分量が出てい

るので、質がどのくらい担保されていたかというのは、おそらく査読問題に関わります。二つの雑誌を並べる時に今後考えるべきこととして、どれくらいのフェーズに分けて、どういう視点で分析したらいいのかといったことを考えていきたいと思ひました。

藤田正勝 今の問題で言いますと、もちろん西田幾多郎にせよ田辺元にせよ、京都大学に來た頃にはまだ研究の成果を発表できる場というのはなかつたわけで、論文を発表する唯一の場所として『哲学雑誌』があつたわけです。そちらの方に重要なものを発表していくということがあつたわけですが、『哲学研究』が軌道に乗り始めてからは、主として二人とも『哲学研究』と、それから岩波の『思想』、この二つに発表する場所を求めていきました。それにしがつて『哲学雑誌』に発表するということはほとんどなかつたのではないかと思ひます。そういう意味で、やはり『哲学研究』を育てていくといひますか。一つはもちろん若い人に研究の場所を与えるという意味もありましたけれども、自分たち自身が今まさに現在進行形で考えている思想を発表して、そしてその『哲学研究』という雑誌そのものを育てていくというような意図を強く持つていたのではないかという気がいたします。私の方からは、『哲学雑誌』やあるいは東京大学の伝統についてお話をいただいたお二人に質問の形でお伺ひしたいと思ひます。

一つは、戦後の大森さんや坂部さんを中心とする東京大学

の哲学の活動をご紹介いただいたわけですが、『哲学雑誌』創立の頃から始まって現在までを全体として概観した時に、やはり戦前と戦後ということで大きく変わるのか、そこに飛躍あるいは断絶のようなものがあるのか、もし違いがあるとすればどういう違いがあるのかという疑問をもちました。それとも一つは、「東京スタイル」と言うときの「スタイル」のもとにどういうことを考えておられるのかという点です。戦前と戦後のスタイルは違うのか、あるいは戦後ということでも、大森さんをはじめとする「駒場カルテット」と比べて、本郷の方と言いますか、山本信さんとか渡邊二郎さん、あるいは岩崎武雄さんといった人とのあいだにはやはり違うものがあつたのか、スタイルの違いみたいなものはあつたのかということ。それから「スタイル」と言う時には、先程の下村さんの言葉で言う「平原」ということですけれども、師弟関係があまり強くなかつたという外的な原因に拠つてそのスタイルが生まれたのか、それとも思想内容、例えば納富さんがおっしゃつた批判主義とか批評主義とかいう思想の面から「スタイル」ということが言えるのかどうか、そこるところをお伺いしたい。もう一つ、第三点として、戦争の傷と言われたわけですが、京都学派を語る時であれば戦争の傷というのは一つの大きな問題となる訳です。和辻さんでも『倫理学』というのを戦前の版と戦後の版で文章を変えたりしているとかいうことがありますし、東京ではそうい

う傷が本当になかつたのかということ。もし仮にないとしたら、なぜ京都では傷ができたのに東京では出来なかつたのかという理由とか根拠とかをお尋ねしたいと思ひました。**鈴木** どれも難しいですけども、一番目の戦争の傷については、これは本当に丁寧な調べないといけないし、勝手なこととは言えない話だと思います。ただ、要するに多分我々二人の話の中でまず和辻が出なかつたというのは大きくて、それは簡単で、和辻は『哲学雑誌』には一回も書いてないという事実があります。これが一番大きい。それから、安倍能成もそうです。和辻も、つまり岩波の『思想』に書くような人たちは、基本的に『哲学雑誌』に一回も書いてないです。同僚であるのが不思議なくらい書いてないのはあつて。ですから、出しませんでした。だから勿論、和辻については考えなければならぬことが沢山あります。それからもう一つは、他になかつたからという意味で大事なのが井上忠。ただし彼の場合は、原爆の体験が大きい。これも色々な意味で、原爆の体験をどう考えるかということ自体これは勿論納富さんに後でお答え、お話ししてもらいたいと思ひますが、しかしある種被害者であつたり、巨大なものを受け止めたりしたということ。戦争の傷という場合は、普通、例外的だと言つた出隆の場合がそうであるように、加害者としての場合の傷ということ。出隆自身は誰かを殺したということか彼が戦争に行つたということはないにしろ、しかし送り込

んでしまったという意味では当然関係がある。おそらく、僕が間違っていたら訂正して欲しいですけども、出隆の場合それを、懺悔道の何々みたいに、哲学の言葉として語ることを模索しなかった。戦争の傷の受け止め方が、学徒出陣との関係においても出隆の場合と田辺の場合は大きく違っていて、どちらが正しいということではないと思いますけれども、難しい問題です。そしてその他の教員に関しては、本当のところどうだったのかというのはもう少し調べてみたい。た少なくとも戦時中の論文については、これ本当に戦時中の？という論文が次々と並んでいます。つまり、皇国史観に基づくようなものがあまりないことは勿論、特に『哲学雑誌』の場合は、マルクス主義関係のものがほとんど載っておらず、左傾化したものが載ってそれに対して反動、といったことのアまりない風のようにして、不思議だと思えます。だから、表向きは他の教員たちはそれほど大きな傷は受けてないように思います。ただ、本当のところはどうなのかは日記などを読まなくてはならないとは思いますが。それに対して井上忠と出隆とは、それぞれ別の意味で特権的なのではないかと思えます。あとスタイルは確かに、僕の場合のスタイルと納富さんの場合のアーリーナは違うし、またまた自身が詰められてないので、おそらく一つあるのは、この後お二人に質問したいことも絡めて言いますと、スタイルなのかアーリーナなのか、あるいは学派なのか、いずれにせよ、東京の

人たちは宗教性が希薄だと思えます。これは決定的で、坂部先生はすごくスピリチュアルなところが特に晩年はあると思いますけれども、特定の宗教性というのは希薄であると思う。勿論カトリックの方々、井上先生もそうですし、加藤信朗先生もそうですし、坂部先生も最後入信されてカトリックになったわけで、本人たちの中にそういうものがあつたのは事実ですし、中世哲学を加藤先生が特に色々深くされているということはあります。ただ、その宗教性を表に出さないというか、それを哲学の言葉で語る、あるいは哲学の言葉の外のものとして語ることが、少しウイトゲンシュタイン的なことになりそうですけれども、ある種のスタイルではないかということをおもいます。それは宗門の違いとかは別にして。山崎正一さんも、彼は仏教徒だったのかな。また、廣松さんに抜き難くある漢語を使うことはどこか禅、また彼の関係論的世界観は大乗仏教における縁起の思想に近いといったことなど色々あります。しかし、いわゆる宗教性のようなものがすごく希薄だというのは大きくて、それが東京スタイルと戦前の批評主義、批判主義とを繋ぐ線なのではないかという見通しは持っています。前半の戦前と戦後に関する質問は難しいです。教師は同じような人がいて、その中で育つた人たちが爆発的な仕事をした。あとは、山本信先生と渡邊二郎先生をどう位置づけるかは、私は二人から教わっているので中々難しいです。上手く言えるような言葉が見つかつたら後で話して

みたいと思います。

納富 三つご質問いただきました。鈴木さんと重なりますが、少しだけ付け加えます。第一に、戦前と戦後というところはおっしゃる通りで、京都の場合、西田が一九四五年に亡くなって人が刷新するところで非常に大きな違いが出ます。

東京は今のお話の通り、もといた先生が続いていくし、学生もある程度、つまり戦前からいた人たちが戦後教授になっていきます。そこをどのように乗り切ったかは説明が難しいところがありますが、いずれにせよ、京大のような大きな違いがないにも関わらず、戦前には比較的学術的でおとなしかったものが、戦後もう少し華々しく花開くということが起こります。そちらの方が不思議で、私たちももう少し見ていかなければならない。もしかしたら継続性の中で起こった成熟のようなものであったのかもしれないし、あるいは新しいことが始まったのか、これは課題です。

第二に、スタイルについても色々な点で、例えば東京と京都というところの地理的な要因、あとは人の流れということもあるかもしれませんが、これは大きな課題ですので、こうした議論を通じて少しずつ考えていきたいと思えます。

第三の、戦争との関係についてですが、一番決定的なのは出降です。出さんは、自伝をはじめ色々なものを書いているので分かるのですが、自分ではつきり書いているように、戦前戦中はマルクス主義にほとんど関心がなかった人なので

す。ご本人も全然関心がないのに、なぜ急に戦後共産党に入ったのか。しかも共産党がよく分かって入ったわけではないのです。だから、異端ということで追放されてしまうわけです。その辺りが本当に謎なのですが、ただ、「私はなぜ共産党に入ったか」や『生き残った人々は沈黙を守るべきか』といった文章をいくつか見ると、懺悔とは言いませぬけれども、そういったものはやはり引きずった一人だとわかります。これは田中美知太郎さんが自伝の中で書いているのですが、世代が一回り上なので、自分が出さんのやったことは批判出来ないと。出さんが戦前戦中に書いたものの中には、『詩人哲学者』の「序に代へて」（昭和18年12月）で、「今こそ実地に、美しく鮮かな死を死にきって戴きたい」といったことを書いてしまっているので、事実上そういうことはありません。ただし、それは京都の様々な、先ほどの中井さんのような方々とは違い、政治的な関与といえますか、そんな意識は薄かったようで、政治的な役割を政府から求められて意見を言うようなこともあまりなかったようです。それに関して一度だけ冗談めかして書いています。自分は海軍の軍人にアプローチされて、サラミスの海戦のことを教えてくれと、つまり、日本が海軍で勝つためにはどうすればいいのか、そんなことを聞きに来られたよと。その程度であれば、学者として別に戦犯だと後で言われるようなことではなくて、基本的には蚊帳の外に置かれていたようだと私は見ています。

マルクス主義との関係は、要するに京都だと三木とか戸坂にあたるところで、東大の場合でも勿論マルクス主義に関係した人もいるわけですが、検挙されてどうのこうのということはそれほどない。もう一つ別の意味での戦争問題は、やはり紀平正美のことだと思えます。紀平は東大でかなり影響力はあって、ヘーゲルの授業を持っていました。そして、そこで教わっていた出隆とは親しかったようです。ちなみに出隆さんは、家で行っていた研究会を「ヘーゲル研究会」と名乗っていたと自伝に書いています。どうしてなのかと思つていると、最初ここでヘーゲルを読んでいたからなのでしょうが、ヘーゲル研究者には一方で紀平のような人もいれば、他方で左翼的な人、出さんのヘーゲル研究会に出ていた金子武蔵のような人もいました。そういう意味で戦前のヘーゲル研究というのは、右と左の両面が東大にあって、しかも決して仲が悪いというのではなさそうですね。少なくとも今からみると、かなり両極端の人たちが同居していた。紀平さんという人については、東大の人たちも少なくとも国粹主義的な面については疑問に思つていたかもしれないけど、ヘーゲル研究者としてはとりあえず受け入れられていたようです。ただし、紀平のやったことを戦後哲学者たちがきちんと反省したかは、私も聞いてないですし、そのまま無視されてしまつていゝのではと思つています。ということ、東京の方に戦争の傷のようなものが全くなかつたわけではないのですが、

ただあまり大きな問題になるものはなかつた。あえて言えば、和辻があまり反省してないのではないかといったところになるかと思ひます。

鈴木 スタイルについては全然練られていないので難しいですし、しかもスタイルというのは戦前と戦後で同じ東京と名付けて通じるかというところも難しいと思ひます。それでもスタイルという言葉を使いたくなるのは、今日さしあたり挙げた駒場カルテットの四人、加えて加藤尚武先生は強烈な文体をお持ちだと思ひ、少なくともこの五人はまさに強烈な文体、普通の意味でのスタイルの持ち主だと思ひます。これは多くの人がかぶれたりもするし、廣松渉の文章は誰が見ても分かりますし、若いころのお弟子さん、例えば高弟であるところの熊野純彦さんの若いころの文章を読むと、廣松渉そっくりですよ。最近の文章はむしろ坂部先生に近いということは、何かある種の系譜を感じますけれども。井上忠先生の文章、これはもう一目で分かる。大森先生も、おそらく、日本語の散文の中で一番美しいものだと思ひますけれども、これも先生独特の硬質な文体があつて。これは、何か本人たちの特殊な才能だと言つてしまえばそれまでですけれども、そういう意味での狭義のスタイルというのが、哲学とどこか結びついている点、戦前のいわゆる哲学史研究論文のスタイルの人たちとは違ふと思つています。今の四人ないし五人も皆哲学史研究者ではあるわけです。そうであるけれど

も、独特の文体もあるというのが彼らの素晴らしいところであるので、それが突然変異であるのかはよく分からないけれど、僕はスタイルという言葉をあえて残したいということです。

藤田 今お話を聞きしていて、スタイルということにも関係しますが、京都の哲学者、東京の哲学者の違いを考えたとき、ご指摘があった政治の問題と宗教の問題、この二つが大きいかなという気がいたしました。政治の問題に関しては、西田の弟子たちの中に、特に太平洋戦争が始まってから積極的な発言をする人が多く出ました。一つは西田と近衛文麿の関係が背景にあつて、政界とのつながりを持つ人が多くいたということがあります。政府の方から何か意見を求められたことがあつて、そういう発言をするということがしばしばあつたと思います。どうして東京の方はそれがなかつたのか。それは、やはり戦前の哲学を担当された方が、哲学者は政治に踏み込むべきではないという、紀平正美みたいな例外はもちろんあるわけですが、そういう考え方もつっていたのか、そこがちよつと気になるところです。

それからもう一つ、宗教性ということに関してですが、西田以後、仏教の影響、とくに禅の影響が強いというのは間違いないと言えるわけですが、それをどう説明するかというのは少し難しいところがあります。西田は若いころから禅に対して非常に強い関心をもっていました。しかも、当初は

いかに生きるべきかという問題を解決できるのは哲学ではなくて禅であるという考えを強くもつて禅に打ち込んでいました。それが、ある時期から哲学のほうへシフトしていくと言いますか、力点を置きなおしていくわけですが、しかしそれでも、その思索の根底に禅の影響はあつたと思います。そういうこともあつて、例えば久松真一であったり、西谷啓治であつたりといった人たちがその影響を強く受けました。それは先ほどの「密度の濃さ」ということにも関係すると思いますが、西田の考えている哲学というものを、やはり弟子たちはある意味で踏まえてと言いますか、それを批判する場合であつても、それを一旦踏まえたうえで、自分なりの哲学を展開していくことをした。その時に、西田の思索の根底にあつた禅を受け継いで自分の思索を展開していくことがあつたのではないかと思えます。もちろん他方で、戸坂潤や三木清など、まったく違った方向に進んだ人もいます。三木は遺稿として『親鸞』と題された草稿を残しましたが、西田とは違った方向で宗教の問題を考えようとしていました。その間口の広さといえますか、いろいろな人がその中で活躍をしたというのも京都学派のひとつの特徴かと思えます。いずれにせよ、東京と京都の違いということを考えるとき、今言いましたように、やはり政治と宗教ということが問題になつてくるのではないかと思えます。

上原 ここまでのお話の流れに、一言、付け加えたいと思

ます。戦前から戦後への変化について、今のところなかなか明確にできていないわけですが、今日、まだどなたからも指摘がなかったところを申し上げておきます。現代の東京の哲学者、敬称略ですが、廣松、坂部、大森といった一連の方々が、戦後、華々しい哲学を作られた。檜垣立哉先生のご研究によると、京都学派からの影響がその哲学者たちの思想の中に見られる。例えば、廣松を詳しく読んでみると、確かに西田が設定したような課題を引き継いでおり、まさに違うスタイルで解明しているとも言える態度、あるいは哲学の展開が見られます。このように、戦前の京都学派の思想を引き継ぎつつ、戦後のある時期に来て東京大学で、過去のさまざまなものを蓄積した華々しい哲学が開花したという考え方もできるのではないのでしょうか。ただ、それを確信するには、テキストをきちんと比較対照する研究を行わないといけないわけですが。

納富 確かに、戦後もう七十年以上経った今から見ると、少し見えてくるところもあって、少なくとも、檜垣君とか私たちが学生の時は、西田について論じる人は少なかつた。中村雄二郎とか坂部さんとかが、少しずつ言い始めている時期だったので、おそらく意図的に読んで使っているということはないと思います。特に大森先生は、読書経験としてどのぐらいあったのかは不明ですが、むしろ若い時からナチュラルな形で問題を引き継いだということはあるでしょう。必ずし

も誰がどの時期に何をどう読んだという話ではなく、より大きな思想の流れの中では、そういう傾向が生じたのではないかと思います。

鈴木 檜垣さんの言っていることはごもつともで、実際の読書体験とか影響関係という次元と、事柄そのものとで分けた場合に、事柄そのものとしてはやっぱり、大森先生は中々難しいことがあると思います。しかし、少なくとも廣松と坂部の二人に関しては、京都学派の問題をある時期から徹底的に引き受けたというのは事実だと思います。実際、坂部先生の場合には、自分の哲学を作り、若い頃から大和言葉を使っていた時、そして海外で仕事をする時に、西田を読み、和辻を書き、彼が一番共感されたのは明らかに九鬼周造ですけれども、その影響下で自分のものを作っていたということがあります。さらに廣松は、もつと若いころから読んでいて『近代の超克』という有名な本があります。あれは要するに、京都学派は、高山岩男も皆もかなりのところまでやっていたけれども最後は結局駄目だと言うわけですが、そのようにいうのは、そこまでやっぱりすごかったと彼は分かっていたからですよ。だからこそあえて批判をするための本を書いたわけで、彼は決定的な影響を受けている。彼は密かに新ラント派に関しても、当時出版されていた翻訳書を無数にコレクションしてよく読んでいたということがあります。西田をも含めてよく読んでいて、それが漢文脈の、西田先生とはや

はり言葉遣いは違いますけれども、独特の文体に移っていった。事柄としては坂部や皆さんがよく受け継いでいるけれど、一番影響が強かったのは廣松渉ではないかな、これはおそらく実証できると思います。

藤田 私も廣松さんが書いたものを読んでいて、かなり西田のことを意識して書いておられるのではないかと思つたことがあります。さらに、先ほど挙げられた中では、大森荘蔵さんはかなり異質な思索というか、書かれる文章も大分違ふと思つていましたけれども、亡くなる直前に「天地有情」ということを言われました。ここで言われていることは、西田そのままだと言つてもよいと思います。全然西田の名前を挙げないし、それらしいことは何も書いていないのですけれど、やはり根底のところですつと西田の哲学を意識していたのではないかと思ひます。

それからもう一つ、東京学派や東京スタイルといったことと関わつて少し申し上げたいと思つたのは、「京都学派」という言葉は最初、はつきり文章で書かれたものというところで言えば、戸坂潤が初めて使つたわけですが、要するに批判的な文脈で使われました。京都学派というのはこういう制限をもつていて、それを乗り越えることが大事なのだというのが戸坂の言ひたかつたことであつて、京都学派というのは外から貼られたレッテルだつたのです。しかもそれを称賛してではなくて、むしろそれを批判するという文脈の中で貼られた

レッテルでした。それに対して、その中にいた人は——例えば下村寅太郎さんなどはそのことをはつきり言っています——京都学派に属しているということをはほとんど意識していなかったのです。このことも、京都学派とは何か、その特徴は何かを論じるとき、考えるべき一つの点かと思ひます。

それに対して、東京の哲学者の特徴を言い表すのに、学派ではなくスタイルとか、アリーナとか、セオリーとか、いろいろな言い方がされましたが、学派という場合には、やはりあるテーゼを共有してということが前提になりますので、学派よりもそうした表現の方がびつたりするのかなという印象をもちました。そうだとすると、逆に、今われわれが「京都学派」という言い方をするとき、その「学派」という言葉をどのような意味合いで使うのかということが問われてきます。とりあえずそのようなことを感じました。

二 質疑応答

上原 では、今からフロアの皆様とご一緒に議論したいと思います。ご意見、ご批評のある方は挙手をお願いいたします。

井上克人 井上でございます。今日はお話面白く拝聴いたしました。二点質問がございます。一つは西田の実在論の論文が哲学界で認められるようになるのは、ご存知のように、

一つは紀平さんが絶賛したことにあります。紀平さんはヘーゲル研究者ですが、結構、禪に打ち込んでいた。当時、東京の哲学界でも禪に打ち込み、あるいは禪に関心をもっていた哲学者がいたのかという点を確認したい、これがまず第一点です。それからもう一点は、『哲学研究』第六百号でも触れてはいますが、いわゆる京都学派、西田とか田辺といった哲学者に対する批判です。先ほどの藤田先生のご発表にもありましたけれど、ギリシャ哲学の田中美知太郎さんがその代表でしょう。いわゆる西田、田辺というモノローグ的な哲学を批判する人が、京都大学にいらつしやいました。今お聞きしたいのは、京都スタイル、東京スタイルといえますけれど、いわゆる古代ギリシャ哲学研究者の田中美知太郎や藤沢令夫といった、いわゆる京都学派の古代ギリシャ哲学の研究スタイルと、東京大学の古代ギリシャ哲学の研究のスタイルがあります、どういう違いがあるのかという点です。今日、丁度、納富先生もいらつしやっているので、それをお聞きしたいと思つていきます。

納富 一つ目の問題はおつしやる通り、東京の哲学者はバツクグラウンドが、初期だったら井上円了とか清沢だとか色々ありますので、仏教系も多いし、何人かそういう人はいました。紀平もそうです。ただ、紀平の場合は思想とかなり結びつけていたという点で、他とは違うと思います。先程鈴木先生もおつしやったのと印象的には近くて、西田などとは違

い、自分の思想の体系の中核で結びつけるということをした人はあまり他にいないように思います。

鈴木 本当のところはどうかは分かりませんが、

納富 勿論そのところは白黒、一とゼロということではないので、丁寧に見なければならぬと思います。政治とも関係あるのですが、井上哲次郎は結構長く生きていたので、国民の道徳的なことも色々と書いています。国民精神研究所といったところで書いてはいるけれども、あまり影響力がなかったのか、皆ありがたい教えとして無視したのか。日本精神のようなものを持ち出す場合のパターンもいくつかあり、神道のパターンもありますね。禅などとの関係がないとは言いきれず、そこが見えにくくなっている可能性があると思いますので、考えていく方がいいと思います。もう一つ質問頂いたギリシャ哲学の研究ですが、私が学部生だった頃は、東京と京都は全然違うスタイルだということになっていました。それは各分野で色々な経緯があるので、一般化できるかわかりません。ただ、京都のギリシャ哲学の場合は本当に面白くて、田中美知太郎さんが来てから、かなり意図的に哲学史的研究・文献学的研究というカラーを打ち出したことで、哲学の他の分野以上にそのカラーが強くなったということがあると思います。それから、先ほどから名前が出てくる東大の井上忠先生と京大の藤澤令夫先生は大体同じ世代ですけれども、かたや井上さんが大森荘蔵さんたちと一緒に分析哲学に

取り組んだ時、京都の方ではギリシヤはギリシヤだという反対の態度をとりました。果たして一般化できるのかどうかわかりませんが。ただし、状況としては、学派という言葉を使うのは問題ですが、各分野で自己意識的に、先生との教えの関係の中で、こういうやり方をとっていくのだという態度決定があったのではないかと思います。東大の方が昔から哲学史研究など文献的で地道だと言いますけれど、戦後のギリシヤ哲学研究については京大の方がむしろそれを強く打ち出したところがあるので、先程時代別と言ったのですが、分野別でも多少色が違うのかなという気がします。

鈴木 求められていないことを答えてしまいましたが、私はデカルト研究から出発したので今の納富さんとほぼ同じような印象を持ちます。結論から言うと、戦後の京都は、あくまでも印象ですけど、京都学派と一つにくれるものではなくてもなくて、いくつかの、もしかしたらあまり仲のよろしくない人たちも含めて色々いるのかなというのが僕の率直な驚きでした（一同笑い）。とりわけ哲学史研究は、野田門下の方々ですけれども、おそらく京都学派への反動で、テキストということが非常に大きかった。固有名詞はあげませんが、ある研究会に出た時、僕は哲学史研究というものは基本的に事柄を論じるための、しかも自分たちの周りにないことを考えるための、ドクサから出るために哲学史研究をするのだと、それで事柄を考えるのだと個人的に思っていました。ですが、そ

れは哲学史研究ではない、テキストを読みなさいとその時に出席されていた京都大学出身の先輩方に怒られたことをよく覚えています。それはやはりある種の反動で、それに対して、ある意味そういう反動を考えなくて良いというか、戦前の哲学史研究者ダメだ、もう少し事柄を考えようと我々は何とか良い方向に……（一同笑い）。これは僕の価値判断が入りますけれど、そういう雰囲気は感じました。それがほぼプラトンやアリストテレスの場合と似ていて、両方上手くやればいいと思うのですが、僕の接した人々はややそっちの方にきつかったかな、という印象は持ちます。

平山洋 静岡県立大学の平山です。どうも、納富先生、私の本を引用して下さってありがとうございます。『大西祝とその時代』は修士論文でございます。一九八六年と八七年の二年間で一生懸命調べました。東北大学の思想史系のやり方です。それで、八九年の七月に出ていますので、丁度三十年です。三十年前の本が今でも読まれていることに、私本当に感動してしまいました。それで、とりあえず東京大学の哲学科の話でちょっと知りたいのですが、今の話のように『哲学雑誌』は主として西洋の思想の紹介、分析、検討、たということになりますと、大森先生や加藤先生や坂部先生や廣松先生の研究は『哲学雑誌』には載らないということでしょうか。
鈴木 加藤先生を除いては存命ではないのであれですけど

も、普通に載ってました。

平山 違います、彼らの思想の研究を……

鈴木 ああ、彼らに「ついて」ね。

平山 そうですよ。つまり、デカルトだから載る、しかし、廣松は日本人だから載らないと言っているようにも少し聞かされたので、廣松先生の思想の研究をした場合、これは『哲学雑誌』に載るのかどうかということを知りたいと思っ

す。

鈴木 載ります。

平山 ああ、載りますか。

鈴木 次号は、他の教員、先生でしたけれども、「松永澄夫特集」みたいなものもあります……。

平山 あ、今はもうそうなさっている。ああ成程、失礼しました。

鈴木 それは今の『哲学雑誌』ということになりますけれども。戦前、井上哲次郎の時代までは、比較的東洋のものが多かった、それが純化されていった。それで、比較的そういう研究論文が増えていったというのが大筋です。ただ、戦後はやや変わっていった、ただその中で、田辺についての論文とか西田についての論文が『哲学雑誌』に載ったかどうかは怪しいですが。具体的に言うと、僕が理事になってからですけれども、「日本語の哲学」という特集を組みました。そして次号は、「松永澄夫をめぐって」という副題はつきません

が、実質的にそういうものであって。これからは投稿論文でも、哲学論文であればいいということになるかと。それは健全なものだと思います。

平山 ああ成程、失礼しました。

鈴木 いえいえ。

平山 私自身の偏見があったような気がいたしました。

鈴木 かつては載らなかつたかもしれません。

平山 実はもう一つ、井の哲の話と関係があるのですが、井の哲さんは確かに、多くの愛国主義的という肯定的だけれども、端的に言えば国粹主義的。それで、彼自身も『勅語衍義』で書いて、舌禍事件を起こしまして、それで、はつきり何かしている。相当軽薄な感じがありますよ。大西祝を追い出した張本人でもあります。東大哲学科における井上哲次郎は、やっぱり黒歴史で絶対に触れてはいけない問題なのかどうか、それも聞きたいなと思います（一同笑い）。

納富 そうですね、基本的に以前の評価がそれほど高くないので、今は少し見直し傾向にある。

平山 ああ、見直し傾向にある!?

納富 つまり一つは、井上哲次郎はとにかく長くいたと（一同笑い）。東京の先生たちの話にでてくるわけです。これは多分京都と雰囲気が違うところで。つまり習った人たちが、井上哲次郎はとにかく早く辞めてくれということを言いまくっているのです、その後の人たちは、井上哲次郎は哲学者と

しては駄目だということが定着して、ほとんど問題にしなかつたというのが一昔前二昔前の印象だと思えます。ただ、最近はもう少しきちんと評価してあげた方が良いのではないかと。例えば、彼が行なった日本思想史研究です。あれは大雑把かもしれないけれども、朱子学と陽明学といった枠組みについてどう評価すべきかといったところで、もう少し客観的に見てあげれば良いのではないか、という程度は見直されています。このように決して黒い歴史ではなくて、逆に言えば、完全に無視されてしまっていたということが問題視されています。

鈴木 僕は井上哲次郎を、本格的に読まないといけないとは思っているのですが、読んでませんけれども。今の状況だったら二つで、今納富さんの言ってくれた、丸山眞男の日本政治思想研究は、内容はともあれ枠組みみたいなものは結局井上哲次郎によつて作られて、それを批判することであるの本は書かれているというような仕方ではじまった評価が一つある。もう一つ彼の現象即実在論、これは西田への影響が強い。これは、例えば、専門家によつては意見の分かれるところかもしれないけれども、『善の研究』において圧倒的な影響を与えているという人もいます。可哀なことに、井上哲次郎そのものを逆にものすごく持ち上げる人は少ないかもしれないけれど、少なくとも、今の二点では、重要な思想家として、普通に黒歴史とか何とかということもなしに、淡々

と見たら、これくらいは偉いのではないのという再評価がはじまっているくらいでしょうか。そして我々も、そういうことを少しはしてみようかということです。

平山 ありがとうございます。

上原 戦争中の雑誌の具体的な内容は、どのようなものでしたか。

鈴木 具体的にということですが、紹介のレベルを超えて……勿論中には色々なことがありますよ。しかし、大きく言うと、昨日たまたま日本哲学会の学会誌が届きましたけれど、ああいった雑誌に載るクラスの題名の論文が、例えば「何々における何々」であるとか。それは具体的に言うと、時期区分を正確に覚えていないものもありますけれど、新カント派だったりとか、ハイデガーだったりとかそういうものの、あるいは近世も、後は時期区分的にはもうちょっと後かな、ギリシャ哲学も出て来るわけです。そういった、普通の哲学の研究雑誌に載るような論文が出ているということが基本です。紹介というと、最初の方だと「メーヌ・ド・ピランについて」とか、「メーヌ・ド・ピランはフランスのカントなり」みたいな論考が載るわけです。これは、とても研究とは呼べませんよ。それが徐々に、まさに研究スタイルの論文が出てくるというのが一番大きいのではないのでしょうか。これは具体的には、先ども申し上げましたけれど、今週に

は総目次を私たちの研究室にアップしますので、それをご覧になれば、エクセル資料で一覧が並んでいるだけですけれども、どのようなものであったのかは、すぐ分かるようにしたいと思います。

朝倉友海 神戸市外国語大学の朝倉です。この座談会のテーマは斬新ですが、こういうテーマがどうして成立するようになってきたのかを考えると、それが日本哲学の理解をどう変えるのか、質問したく思います。成立するようになってきた直接の理由は勿論、鈴木先生の科研があり、中島先生の科研もあり、東京大学で行われてきた哲学をどうふり返るかという課題があるわけですが、そうすると、何々学派とは外から言われるという話がありましたけれども、どうもそうではないところがあります。近代日本の哲学を考える時に、外国の目から見た日本哲学ということで考えると、まずは京都学派になる、しかし京都学派から大分時間が経って、その間にいた色々な人たちにもまた京都学派と同等のステータスを与えないといけないのではないかという問題意識があり、いわば内側から、東京学派として再評価しようということになっています。つまり、京都学派のイメージがまずモデルとしてあって、それによって戦後の東京の哲学を評価しようということですが、先ほどから何度も出てきているように、それはうまくいかないところがある。単に京都と東京が違うとい

うだけではなくて、何かもう少し根本的に考えないといけないのではないか、ということですが、何を考え直すことになるかという点、東京学派そのものだけでなく、既成のモデルとなっている京都学派のイメージの方にも問題があるように思える。それに、今日は二つの学派ないし二つの雑誌の対比を考ようとしているわけですが、戦後の東京哲学ではずっと軽視されてきた井上哲次郎の見直しという課題も挙がっていました。古い時代の東京大学の哲学の見直しもまた迫られるのだとすれば、京都学派についても同様のことが言えるようにも思えます。そこで、主に藤田先生と上原先生にお伺いしたいのですが、東京学派の研究は京都学派の研究をどのように変えていく方向にあるのでしょうか。この点をお聞きしたいと思います。出来れば東京大学の先生にもお伺いしたい。

藤田 鈴木・納富のお二人の方が今進めておられる東京学派なり東京スタイルの研究が、これからどういう形でなされ、またどういうものになっていくかがより具体的になってから、それが従来の京都学派研究にどういう影響を及ぼすのかといったことについて、より明確に議論できるようになると思っています。

私も、この前出版した『日本哲学史』という本の中で、戦後のところをどう論じるのがよいかという点でかなり頭を悩ませました。私自身、先ほども名前があがっていました大森

さんとか坂部さんとか廣松さんとかを東京学派と位置付けて、それとの対比で京都学派の問題を考えたり、あるいは京都学派というモデルを設定することによって東京学派の特徴を浮き彫りにすることができるかなとも考えたりしましたが、そのような枠組みの中で検討しても、あまり新しいものが出てくるとは思えなかったのです。それで、むしろ「自己」であったり、「言葉」であったり、あるいは「身体」といったテーマで、東京や京都の人たちの考えたことを、垣根を設けないで論じた方が、日本の哲学者のやってきたことを適切に評価できるのではないかと思ひ、そういう章立てを考えました。私自身は、今も、東京学派と京都学派という枠組みを設定した上で、両者を比較して、そこで何か新しいものが見えてくるかという点に関してはやや懐疑的であります。

上原 一つには、京都学派を変え、京都学派は変わるのかという問いの仕方がなされたと思いますが、まず、もう京都学派は終了しているというのが一般的な理解だと思います。

朝倉 いえ、これまでの京都学派の理解も変わっていった、そのことよって日本哲学というものの理解も変わっていくという……

上原 はい、そこは理解できているかと思っておりますが、ただ、今、京都学派はもう存在しないという前提になると思うのです。ですから、京都学派の知の遺産を今後どう引き継いでゆくのかという問い方になるのではないのでしょうか。そ

こで、頑張つて、貴重な京都学派という知の遺産を将来に引き継いでゆくためには、そのままただのアーカイブとして引き継ぐのではない。そういう側面もあるわけですが、それをベースにした新しい京都学派起源の哲学を生み出してゆくべきだと、私は日頃考えています。そのためには、外側から何らかの思想と比較し切磋琢磨して生み出してゆくのが、自然なあり方ではないかと思ひます。今日は東京学派という言い方をしてありますが、それは一つの比較対象です。京都学派の知の遺産を引き継いでゆくためには、それだけではなくて、最近、海外でも日本哲学の研究が非常に盛んになっていきますので、海外で理解し解釈され新しく生み出されつつある日本哲学と呼べるものとも比較対照しながら、新しい京都学派ベースの知を生み出してゆくことが必要ではないでしょうか。日本国内で言うならば、今日は東京大学の納富先生と議論しておりますけれども、東北大学はどうなのだということを、どなたか仰っていました。明治に日本哲学が始まり一五〇年以上たった今、ようやく日本哲学の歴史を本格的に見直す機会が来ていると思ひますので、「京都対東京」ということで企画してみました。しかし、もっと色々な全国の他の大学で生まれてきた哲学研究とも、対比させていく必要があると考えています。

藤田 先ほど朝倉さんの質問に、垣根を設けないような仕方で戦後の思想をみたらよいのではないかと申し上げました

が、それと矛盾するように響くかもしれないけれども——
私自身は矛盾しないと思つていますが——、戦前の京都学派の知の遺産を引き継ぐという営み、あるいはそれを批判し乗り越えていくことも京都学派の営みとして考えてよいのではないかと私は考えています。その時に必ずしも京大の教員であることは必須の前提ではありません。戦前の京都学派が持っていた可能性を新たな観点から検討していくことは、どこに所属しているとかいうこととは関係なくやれることであるし、そうした試み自体を京都学派の営みの中を含めてよいのではないかと思つています。私自身は必ずしも京都学派を過去のものとして考える必要はないのではないかと思つています。

鈴木 朝倉さんがおっしゃりたいことはよく分かるつもりですが、ただお二人が言つたことはかなり納得するところがあつて。つまり、東京学派とか言いましたけれど、二十世紀前半における京都における哲学、京都学派というのは、ドイツ観念論、たつたり、また二十世紀後半のフランスの六十年代だつたりと匹敵する哲学運動でした。これはもう、固有名詞として残るものです。京都学派という呼び方が良いかどうかという問題はまた別ですよ。しかし、それは明らかに古代ギリシャがありドイツ観念論があり、フランスの六十年代思想があつたのと同じように、二十世紀前半に京都学派がやったことは大きかつた。多分朝倉さんは、それをスタティックに

解釈したりとか、固定的に捉えたりするのは面白くないから、例えば東京学派と突き合わせてみると面白くなるのかどうかといつたことを聞きたいのだと思つています。ただ、ちよつと突き合わせてみたら何か変わつていくかもしれないという程度の話だと思つて。何故そのようなことを言うかという、僕は哲学会の現在理事長だし、しかも井上哲次郎や桑木巖翼のことを今回通史サーベイしてみようかというのは、奇特な人しかやらないのでやつているわけですよ(二同笑い)。僕は別に納富さんほど東京大学の代表者でも東京スタイルの代表者でもなくて、他にやる人がいないからやつてみようということですよ。その中でもしかすると何か出てくるかもしれないといふことにはある。ただ、一方で我々二人の場合は、そこで育つているので、我々にとつて自分で気づかないような思考の制約の中にあるのかなという恐れはあるわけです。その中でしか哲学していないというのは嫌だから、どういった影響があつて生まれたのかは自覚しておきたい。ただそれは、他の世界の人にはもしかすると関係ないかもしれないという意味で若干の責任があるということですよ。もう一つだけあるのは、常に一つ前の世代に反逆して別のものを作つていったということはあると思つて。井上哲次郎に対して、桑木巖翼が東洋哲学は避けてしまおうとか、坂部先生の世代も上の世代に反逆というふうな。彼らも激しい人たちではなかつたけれども、一つ前の世代をひっくり返し、親殺しまではい

かないけれども、上の世代をみてそれとは違つたことをしていくという流れはあつて。これはまだ仮説ですが、藤田先生もおっしゃつて下さつたように、そういった仮説が成立するかをこれからやってみたいと思います。以上です。

納富 皆さんがおっしゃつたことに対して、私はちよつと違う感じを持っています。東京と京都を比べるのはそもそも全く便宜的なもので、思想がどう動くということもつと色々な布置があると思います。例えば、京都と一言で言われても波多野精一あるいは天野貞祐とか色々な人たちが出入り入つたりしていて、普通それらの人たちは、実際の影響力とはまた別の問題として、京都学派にカウントされないのではないのでしょうか。おそらく少し違う影響だつたという扱いになると思います。逆に言うと、丁度ギリシャ哲学ということで私が名前を出した出隆の一番初めのヒット作というのは、西田幾多郎の焼き直しというのか——どちらに対しても失礼ですがけれども（一同笑い）——西田哲学を咀嚼して一般向けに書いた本です。このように、東大の教授が西田哲学の紹介をする本を書いてスタートしているといったことを含めると、色々なコースをもう少し緻密に見ないと思想的に見失つてしまうものがあるのではないかというのが私の感覚です。今回名前の出ていない色々な人、例えば東北大学にも色々あるのではないか。他にも、例えば西晋一郎、彼は西田とかなり険悪だつたと思いますけれど、あの人が戦前やつた

ことはどうだつたのか。さらに、東京と京都といつても結構抜け落ちてしまう人たちがいるので、そういった人たちは丁寧に、視野だけでも据えるというのが私の立場です。東京の中でも、大西が早稲田に関係があつて、丁度早稲田を話に出しましたが、他にも慶應や東洋大といった私学も中々微妙な関係にあります。出隆の本を田中美知太郎さんが書評でちよつと批判したら、岩崎勉が反論するわけです。早稲田の先生ですよ、どうしてだろうと。東京なら東京アリーナ、東京スタイルとして考えられますが、東大ではないのです、明らかに。何故そのようなことが起こるのかなと思うことがよくあります。そのように見たら、京都の中にも多元的な見方や層があつて、そのところをもう少し丁寧にみるべき時期に来ているのではないか、というのが私の印象です。

加藤泰史 一橋大学の加藤と申します。とても興味深いお話をありがとうございます。少し「学派とはなにか」というところからご質問したいと思います。今、納富さんの方から、もう少し多元主義的に布置図を考えてゆくという非常に興味深いお話を伺いました。一般的には学派といった場合には、まず問題関心の共有あるいはテーゼの共有さらにまた方法論の共有などがあり、それが第一世代、第二世代、第三世代というように継続されてゆきますと、批判的な継承となつてくるかと思えます。例えばフランクフルト学派とかケンブ

リッジ学派とかを考えた場合には、そうしことはある種の前提条件として、おそらく考えられてくるのではないかと思えます。海外の研究者が京都学派という言い方をされる時には、西田、田辺あるいはそれ以降の世代で、ある一定の問題意識またはある種のテーゼの批判的な継承などが、割とヨーロッパの学派に合うような形で分類しやすい、あるいは見えやすいということがあるのではないかと思えます。今、東京学派とか、あるいは苦労されてアーリーナとかスタイルという呼び方をされていますが、納富さんにまずお伺いしたいのは、おそらくこのアーリーナという言い方をされる場合には、先ほどの多元主義的な布置図をお考えになりたいということが、かなりおありになるのではないかと思えます。しかし他方で、学派という言葉をお使いにならないというのは、やはり一般的なシューレの前提条件を満たすところまでゆかないのか、あるいはまた別の理由があるのか、そこをお伺いしたいと思えます。鈴木さんは、スタイルという非常に興味深い呼び名をされていますけれども、例えば駒場カルテットの場合に、英語のスタイル、あるいはドイツ語のシュティールというの、必ずしも日本語の「文体」という意味だけではないと思えますけれども、しかし日本語でいう「文体」の問題に言及されていました。そうしたスタイルということで、先程言及しました学派の前提条件ということとの関係を、どのように考えられているのかをお伺いしたいと思います。それ

からあと、藤田さんと上原さんには、次の質問を投げかけたと思います。これは多少答えにければスルーして頂いてもいいかもしれませんが。京都学派の継承といった場合に、藤田さんは今必ずしも京都大学という、大学機関または組織に限定する必要はなくて、ある意味ではその外部でまだ生きていけるということを言われたのではないかと思えます。そのご指摘を具体的に考える場合に、京都学派の流れというのは現時点でどういう形で継承されているのかをお伺いしたいと思います。逆に上原さんには、京都学派は終わったとおっしゃられたので、どの時点で終わったのかということについて、あるいは最後の京都学派は誰なのか、そしてなぜそれまでの問題関心なり問題意識、あるいはテーゼなりというものもが、批判的な形でも継承されることなく途絶えてしまったとお考えなのかというあたりをお伺いできればと思います。納富 どうもありがとうございます。いい加減に流してはいけない点をもう一回きちんと考えてみますと、学派という概念については、例えばギリシャの時からディオゲネス・ラエルティオスがイオニア学派とイタリア学派を分けて論じていますが、そこで「デアドケー（学統）」と言われるのは基本的にまず師弟関係の継承によるところが大きいです。それを基準に言うのであれば、先程から言っているように東京で私たちが問題にしている人たちの間には、師弟関係はありませうけれども、その絆とか人間関係ということも含めて学派と呼

べるかという論点に関わってきていると思います。つまり、習ったということ自体が師弟関係の必要十分条件なのか、あるいはもう少し違うものがあるのかという継承の問題です。

加藤さんが今整理してくださったことという、例えば「問題を共有する」、「テーゼを共有する」ということになる、おそらく京都の一時期の哲学者は、かなり強い共有があったと思います、方法論もあると思いますが。東京の場合はそういう側面がかなり薄いという点で、私は学派という言葉を使いたくありません。それでは何を共有したかと言うと、任務を共有していたと思います、哲学をすることに對する一つの任務。これは特に初期はそうですけど、明治において日本が西洋哲学をまききちんと学んで伝えるという、それが任務であると。それだけでは哲学ではないでしょうという話になると次の段階に行くと思いますが、その程度の強い共有までをもって「学派」という言葉を通常のような意味で狭く使うとすると、そこでは少し使いにくいなと感じます。では哲学をまきちんと咀嚼してそれをまず議論するところが最低限の任務であるとすれば、それは哲学にならないかと言えそうです。話ではない。というのは、先ほど大西について紹介したように、まききちんとした批判と批評をすることが、創造することの基盤だという任務意識になるからです。その後になると、何が起こったかが問題ですね。先程おっしゃった基準、通常の言葉遣いからいくと、私は東京については学派という

括りでは入らないのではないかと思います。逆にアーナとすると、別の大学、あるいは京大の教授が東京で発表することも含めてアーナと呼べそうで、都合が良いので使いました。

鈴木 学派という言葉を用いたくないが、京都学派は使った方がいいだろうと言うのは、納富さんが説明されたことに尽きます。それは師弟関係と、今日、藤田先生が最初におっしゃいましたけども無という問題意識を共有しているところと、ところが圧倒的ですよ。それと、シエリングとかがいたにして、人類の哲学の歴史の中で決定的に大きいので、これはやっぱりシユーレだと思います。東京の場合、そういうのはあえて言うとき小さいレベルですけど、デカルト研究における東京学派とか、デカルト研究における京都学派というのはあると思いますよ。例えば、野田又男先生と小林道夫先生のご関係はシユーレですよ。所先生から村上勝三で大西さんとかそういう流れはあります。これはシユーレだと思います。スタイルは、少しは考えていますが全部はまとまっています。ただ二つあって、一つは文体です。ただそれは井上哲次郎の文体と坂部恵の文体とでは全然違うけれども、例えば駒場カルテットのような場合は、少し許してもらえるかなと。あともう一つ、これは難しいですが、一応メルロ＝ポンティのスタイルという概念が頭の中にあって、メルロ＝ポンティは一貫した変形ということを言います。それは、一つの主義

主張とかテーゼとかには集約されないけれども、人が凄く変わっていくその変わり方が一貫しているということを言いたいのです。一貫した変形ということを言いたい、それをステイルという言葉で集約していて。そのようなものが、あの四人とか五人にもあるし、あるいはさっき言ったような……これはかなり飛躍しますが、親を少し殺しながら自分たちの哲学を作っていく、そこにはある種の一貫した変形があったと言えるかもしれないくらいの作業仮説です。以上です。

藤田　もちろん私も、学派と言う時には問題関心の共有とかそういうものが重要になってくると考えております。しかし、京都学派と言った時にそういうものがあるかというところ、簡単には答えられないところがあります。それは、以前にも書きましたけれども、いわゆる京都学派というのは、西田の下に集まった学生たちも含めて、自然発生的に成立した集団でした。そういうところに例えば戸坂潤などもいたわけです。そういう人まで含めての問題関心の共有ということは、もちろん言える部分もあると思いますが、全体としてみたとき、かなり難しい面もあると思います。もちろん全てのメンバーという括りをかけなければ問題関心の共有ということも言えると思います。西田にせよ田辺にせよ九鬼周造もそうだと思いますけど、西洋哲学という枠組みの中で見えないものがあるのではないかと疑問を彼らは強く抱いていたと思います。それぞれの思索には、その思索が持つ独特の枠組み

というものがあって、その枠組みの中で見ているかぎり、見えないものがあると思います。そう考えた時に、西洋哲学の枠組みでは見えないものがあるのではないか。例えば西洋の哲学ではアリストテレス以来、存在ということから出発して全てのことを見ていこうとする傾向、ないし問題関心が強くあったと思いますが、そうすることによって隠れてしまうものがあるのではないかという問いが、西田や田辺の中で共有されていたと思います。そういうところから、西田にせよ田辺にせよ、無の問題を考えていったと思います。そういう意味で、何か京都学派独自の性格を指摘するのは可能だと思います。そのように言えば、東京の方にはなかったのかという問いも出てくるかもしれませんが、大まかな言い方をすれば、そういうことが言えると思っております。そういうことと、西田幾多郎が言った「生きて出なければならぬ」ということが深く関係していると思います。直接には、自らの哲学する姿勢として西田はそう言ったと思いますが、ただ単に西洋の哲学を受容するだけでなく、一方ではもちろんそれを受容しながら、しかしあくまで自分が置かれている場所において思索をしていかなければならないという意味あいでも言ったのだと私は理解しています。そういう姿勢を京都学派の人たちは強く持っていたのではないのでしょうか。

もう一つの京都学派はどう継承されているのかという点に関してですが、一つの考え方は、例えば竹田篤司さんの『物

語『京都学派』では、下村寅太郎が京都学派の幕を下ろしたという言い方がされています。要するに直接影響を受けた人たちのグループとしてそれを捉えるというのも一つの考え方だと思えます。その意味で言えば、おそらく下村さんが幕引き人であったと言えるのかもしれませんが。しかし、私自身はそうではなくて、先ほども申し上げたように、西田や田辺の問題意識を受け継いで、ただそれを反復するのではなくて独自の仕方で発展させていくという営みをも京都学派の中に位置づけるのは十分に可能だし、そのことの方がより生産的な将来への展望を持つことができるのではないかと思っています。具体的な例を挙げるとすれば、上田閑照先生がやっておられるお仕事というのは、西田や田辺、さらには西谷らの思索を踏まえつつ、そこで止まるのではなく発展させていくような営みとして位置づけることができるのではないかと考えています。

上原 京都学派の定義はとにかく非常に難しく、ずっと明確になされなまま来ていると思います。私など、この京都大学で授業の折に、定義はよく分かりませんが、済まないの、一応、哲学事典や参考文献の定義の仕方を借りたりしています。先程、朝倉先生からのご質問にお答えしましたが、京都学派は終わっていると申し上げたのは、私の尊敬する氣多雅子先生が、何年前に京都大学で開催された日本哲学会のシンポジウムで、「京都学派は上田閑照先生で終わりまし

た」と仰ったことの引用です。場合によっては、先ほど藤田先生が仰った、「下村寅太郎が幕引きをした」という竹田篤司先生の定義でも良いのかもしれませんが。ただ、やはりどこかで一旦区切りをつけておいた方が、私の頭の中では整理しやすいのです。ですから、京都学派の知の遺産といって、遺産をどう将来へもつてゆくか。それは決して、終わったからもう京都学派の今後の知は不在だというのはありません。つまり遺産という言い方をしたのは、継承するという意味が付随している、そういう意味をこめて先ほど使ったわけです。ですから批判的に継承してももちろんいいし、肯定的に継承してもいいし、あるいは京都学派から少しだけアイデアをもらって、かなり違うものを作り出していくこともいいのではないかと思うのです。

高坂史朗 豊かな、あるいは示唆に富む質疑をありがとうございます。今の話で締めくくりでもよかったのですが、つい手を挙げてしまいました。『哲学雑誌』と、それから『哲学研究』を通して、私の質問というのは、自己規制というのはあったのかということです。というのは、ひとつは鈴木先生がマルクスの文献はない、見当たらないと。明らかに戦前は自己規制があった。一九三一年というのはヘーゲルが死んでから一〇〇年で、その時にヘーゲルの文献が九十三点ありまして、マルクスも最初は二十点ほどで、その次が三十、四

十と増えていく。戦後も増えていきますけれども、『哲学雑誌』『哲学研究』には多分ないだろうと。これは帝国大学であり、あるいはそれぞれの個人が治安維持法に触れる可能性があるからという、そういう規制、それが他のところも、他の観点でも考えられないか。先ほど藤田さんが仏教哲学という、そういう宗教の問題で言うならば、例えば清沢満之が東京になぜ真宗大学を作ったかといったら、仏教から自由になるからだ。そういう観点で言えば、京都の『哲学研究』は護教的、つまり仏教批判したら駄目なのではないかという、そういう気がします。そして『哲学雑誌』のほうは、政治に対して、つまり国家に対してどういうスタンスをとったかということを質問させて下さい。

鈴木 自己規制というのは二つのレベルがあるかと思いますが、編集委員会という言い方はしていないでしようが、『雑誌』の側で自主的に禁じるという、つまり広告を規制するようにして規制するというのと、そもそも研究者や哲学者の側が自己規制してそういうのを初めから『哲学雑誌』に載せない、例えば投稿しないとか研究は密かにやるという、二つのレベルがあると思います。そして、推測ですが、後者が多かったのではないでしようか。国家に関してもこれはもう時期によって違います。つまり、もう明治初期の天下国家を論じられるような時代の話ではなくて、より戦争が近づいた、ないし戦争の最中での話だと思えますけれども、その場合に

ほとんどそういう論文はないというの、どういうことなのでしょう。大事なのは、金子武蔵のヘーゲル関係の国家哲学みたいなものは、著作になるのが四十年代です。あれは確か『哲学雑誌』と関係があったと思います。一言で言えば有機体的な国家論と、あの当時の、まさに国家を支えるような、ヘーゲル解釈とをドッキングしたような、金子武蔵先生の解釈が出たのはまさに四十年代前半ですから、それはむしろ、規制も何もなく載っていたり、好まれたというのは事実だと思います。今読んでも結構驚くべき書物だと思いますけれども、そのくらいしかわかりません、すいません。

納富 特に自己規制について、何が起こったかという、先ほど最初に私が言ったように、色々な雑誌の間における役割分担などがおそらくあったと思います。やはり『思想』はそれなりに重要な役割を持っているし、多分そういうことはもっと自由に発言していた。だから必ずしも東京だからどうだという話ではありません。東京と京都での違いと同時に、それぞれの中で、雑誌や発表の場の違いがあったはずで、『哲学雑誌』は逆に言えばつまらない、「誰々の何々について」という論文ばかり出てきている。それが東京あたりの哲学者の活動の全てであったかどうかというと、そうでもないでしょう。マルクス系もそうですが、右翼系の人たちも別の雑誌でどんどん発表するとか、あるいはもっと一般向けの媒体も混じってしまうとか、色々そういうことがあったと思

ます。ただ『哲学雑誌』に関して言うと、戦前と戦後のタイムトルを見てあまり変わらず、今も変わらず哲学研究に特化するような状況なので、その点について、どうしてそういう一種の自己規制ないし節度が働いたのかというのは面白い問題です。今のご指摘は色々興味ふかいところがあります。宗教との距離という点では、東京は一種自由なところもあります。あまり明治の最初のころばかり持ち出すのも変ですが、井上円了はかなり自由な仏教で、東洋大学を創り、しかもキリスト教の人たちも結構入ってきて論争もします。反対に、先ほど言った『六合雑誌』などを見ていると井上哲次郎も寄稿しています。だから、キリスト教を批判している人だからアウトとかいう図式ではありません。まあ、そういう意味では、東京というところが持っている一種の自由な雰囲気というのとはあつたのかなと思います。

藤田 自己規制といいますが、それよりは納富さんの言われた役割分担ということの方が、ぴったりするように思えます。中井正一でも『世界文化』とか、『土曜日』に発表する文章と、『哲学研究』に発表する論文とはやはり性格が違うと考えていたように思います。ドイツで勃興しつつあるフアジズムを直接批判するような、そういう文章を『世界文化』の方には書いていますが、『哲学研究』にそれを発表するという考えは彼にはなかつたように思われます。それは自己規制というものとは少し違ふのかなと思います。

仏教に対する批判などが『哲学研究』でできたのかという問題ですが、まず西田哲学に対する批判ということを考えてみたいと思います。『哲学研究』では西田に対する批判も盛んになされています。田辺元からのあの様な厳しい批判も載りましたし、左右田喜一郎さんの批判も載りました。西田を批判するということは決してタブーではなかつたわけです。むしろそれを批判することで自分自身の考えを整理し、発展させていくといったことを西田自身も望んでいたと思います。そういうことを許す場所、それができる場所という相互の理解があつたと私自身は考えています。そういうことから言つて、例えば禅は仏教ではないとか、大乘仏教は仏教ではないとか、そういうことを主張する論文も——実際には載っていませんが——、十分な論拠をもつたものであれば、それを拒むようなことはなかつたと私は考えています。

上原 高坂先生のご質問に直接お答えすることにはならないかと思いますが、雑誌の役割分について、今回の準備をしながら少し気になつていたこと、今日、まだ申し上げていなかったことがあります。例えば、『哲学研究』の論文や論説の後の「雑録」、「彙報」というところの情報がかなり面白いのです。それはバックナンバーのリストにも表れてこなくて、一冊一冊見てみないと分からないものです。当時は月刊誌だったからかなり早く回ります。ですから当時の『哲学研究』というのは、情報交換の媒体であつた、そういう側面が

すごく強いのだということを、改めて思ったのです。創刊号から本の広告や他の情報の量が非常に多いのです。例えば、井上哲次郎の訃報を、お悔やみの言葉や若干の略歴を付けて掲載しているとか、京都在内の方が亡くなった場合は、立派なお悔やみの号を作ったりしているわけです。素晴らしい経歴をすべて掲載したり、論文の題目を全部掲載したり、そういうことをしているのです。その他、三木清が帰国したので今度茶話会があるから何月何日どこへ来るようにとか。若い人、もっとベテランの先生方、様々な人たちが研究者のための情報の「場」になっていたと思います。また、これは田中美知太郎さんが書かれていたことですが、学生時代、東京の書店で『哲学研究』を読んだ折、京大の講義のプログラムを見て、このような授業があるなら絶対に京大に行きたいと思っただけです。要するに、当時、京都大学が全国各地の高校生をひきつけ、集めるために、講義や教官名、講義名を雑誌に載せ、若者はそれを見て、京大を志望したのでしょう。『哲学研究』が進学のための情報を提供していた、情報交換誌、情報誌という役割を担っていたのですね。もう一つだけ付け加えます。さまざまな雑誌が一九二〇年代後半から刊行され始めましたが、『唯研』もそうです、『唯物論研究』ですけれども。隣接する分野の色々な雑誌が出てきて、それが京都大学哲学科に送られてきた。今月はこのような雑誌をいただきましたという、お知らせのリストが掲載されている。そ

のようにして、全国の雑誌同士の交換がなされていたようです。こう考えてみると、一種の自己規制というのでしょうか、ここにはこういう論文を載せよう、こつちではなくてあつちにしようといった雑誌の役割分担を、皆さんが何となく認識していたような気がします、いかがでしょうか。

嶺秀樹 嶺と申します。いま東大の話であれ、京大の話であれ、アカデミズムの中で、大学が予算を出していて、それで運営されているのが研究雑誌かと思えます。私の質問は、そうした雑誌の機能が歴史的に見て、いったいどのように変わっていったのか、それとも変わっていないのかというものです。質問の趣旨をもうすこしくわしく申し上げますと、私が京大で学生、院生をしていた頃の『哲学研究』はかなり教員が介入していました、そしてそれに誰がどのように関わることかというところは完全に教員が決めていました。ですから自由に投稿して載せてくれるかどうかではなく、そもそも書けと言われたら書くし、言われなかつたら書かないというようになっていたかと思えます。そういうこともあって、わたしは院生を卒業するような頃には、院生自身が発表の機会を設けるために、自分たちで同人誌めいた雑誌を作り始めた時代でした。ですから当時の雑誌の機能はおそらく、西田・田辺が自分の研究をダイレクトに発表するというようなものではなかつた気がします。そういう意味でも『哲学研究』の機能

には時代によつて相当大きな変化があつたはずで、そこで質問ですが、東大の『哲学雑誌』の場合、アカデミズムの中でどういふ機能を果たしていたのか、歴史的に変化はあつたのか、そして今日状況の中で、今後どうすればいいのかわかるといふことをおうかがいたい。今日では我々が知っているように、岩波の『思想』や理想社の『理想』がありますし、それらは確かに大きな役割を果たしていると思います。そういった商業雑誌との関連で、今大学のアカデミズムにおける哲学雑誌はどういった役割を果たすべきか。若手研究者はほとんど業績を求められますから、それを増やすためのたんなる機会といふことに下手をすればなりかねないですね。大学の雑誌は色々なジレンマを抱えていると思いますが、単なる哲学史研究を超えた哲学を発表する場といふことまで考えるなら、やはり大学の雑誌は商業雑誌にはない機能を果たすものとして大きな意味を持つと思います。歴史的な変遷についての質問と共に、今後のアカデミズムの中の雑誌の役割について、先生方がどのようにお考えになつておられるのか、一つ教えて頂きたいかと思ひます。

鈴木 『哲学雑誌』の場合二つあります。国からお金をもらつたといふことは一回もないか、そこは詳しくは知りませんが、会員の雑誌ですので、大学からお金をもらつてといふことではおそらくないと。しかも売つていたわけですから、増刷も出て。それは今でも同じです。事務局は哲学研究

室にあります、会員、その会員も東京大学に限らないわけですが、会員の自主的な浄財によつて営まれていくということがまず前提だと思ひます。

嶺 はじめから現在までですか。

鈴木 ずっとそうかはわからないので、それは調べさせて頂きます。やはりメディアとしての雑誌といふことに関しては今日も何回もされて、僕も十分に頭に入つていないところがあります。基本的なそういうものだと思ひます。それがまず一点です。ただし今後のことはかなり問題だと思つていいます。僕もかなり危機感を覚えていて、この話を冒頭に話せばよかつたのですが、なぜこのようなことをしたのかといふもつと手前のことを考えると、今日日本において哲学が転換期にあると僕は思つておられるわけですね。しかもその転換期にあるなかで私と納富さんは転換期の宙ぶらりんの状態だと思ひます。つまり例えば、哲学カフェとか応用哲学とかが表に出てきている時代の中で、哲学史研究といふものはある種無用の産物だと言われかねない時期に來ているわけですね。ただし今後哲学がどのようなやり方をするのかといふことについては、正念場だと思つていて、そのために今の時期に調べたり考えたりする必要が、あるだろうと思つておられます。それを前提に話しますが、『哲学雑誌』の場合といふことですが、当然組織の中にあるので、学生のための場を提供するといふことは一つ必要だと思つておられます。僕らの頃には渡邊二郎先生か

ら書きなさいと言われて特集号に書かされました。これはもう命令に近いです。最近はそのようなのは無くなつて、若手枠というものを設けて、これは査読します。しかし残りは別に特集を組みます。これは六本ほど論文を載せて依頼します。将来ドラスティックに変化があるかもしれませんが、今のところはその二つのバランスをよくしていく。これは結局、我々理事や教員が決めるのですが、魅力的なテーマを作つて、雑誌として質の高いもの、他では読めないようなものを、微力ながら出していくしかないと思つています。それは勿論、例えば、『思想』の特集号とどういう風に張り合うかと考えますよ。我々のところでは出せない面白いものを出し、それが魅力的であれば、哲学になんらかの力を与えることが出来るかもしれない。今の時代だと紙媒体の雑誌にはそれ以上の力はないけれど、そのくらいはやつておきたいと考えていて、そのために一応僕とか納富さんとかで知恵を絞つて毎回特集を組んでいるという次第です。

納富 学会が出している雑誌と一般の商業誌の違いは、時期によつて異なると思いますが、一つの視点は学会活動の場合、定例会や発表と連動しているという点です。要するに組織があつて、逆に一般誌である『思想』や『理想』は執筆者同士が顔を見ずに論文を出すということになります。他方で、学会というものは今どこも難しい問題を抱えていると思つています。つまり、アカデミックな中で学会誌がなくなる学会

も出てきますので、学会誌と学会がどういった活動をするのかという問題に直面していると思つています。この観点を外して、ただ単にこの雑誌がどのように機能しているのかということは議論しにくいのかなと思つています。逆に言えば、会員とは何なのかといった前提も段々崩れてきています。そこところは十九世紀の終わりに哲学会ができて、そのあと戦後に日本哲学会が出来たという学界の制度設計にも絡むと思つています。特集については、新しいトレンドで、今どこもやつてゐるから特集を組むというのではなく、やはり次の時代のために考える必要があります。例えば何とかの百周年記念という形で特集を組みますが、それをするによつて次の新しい段階を築くということです。『哲学雑誌』も、ヘーゲルとかライプニッツとかの特集を組むことで新しい方向を目指すという意図もあつたので、これからもそんなイニシアティブを取れるのかという問題だと思つています。

鈴木 一つだけ、『哲学雑誌』には、この手の日本哲学会みたいな組織の学会はなくて、何となく大学に足場がありながらやつてゐる。しかもテーマが決まつていない自由さがあると思つています。それはどうしてかという点、加藤さんがいらつしやるから言いつらいですが、日本哲学会の特集は工夫されているけれどもやっぱ投稿論文、査読論文が中心です。しかも今色々改革しようとしていることも、結局、若手が就職するための一番大事な投稿先になつてしまつてゐるわけです

よ。これは変わらないです。それを僕らは、出来るだけそのような形にしないで、Selbstdenkenの中で毎日考えていることを載せられるような、中々実現は難しいですけど、その精神を受け継ぎながら特色ある雑誌をつくりたい。それは商業誌でも難しいでしょうし、それなりに意味はあるのではないかなと思っています。

藤田 『哲学研究』も同じように大学が予算を出しているわけではなく、会員の会費で自発的に運営される学会であり雑誌であるということがまず言えると思います。今は、大学単位の雑誌とか思想家単位の雑誌とか色々な雑誌が沢山出ています。その中で『哲学研究』や『哲学雑誌』が果たすべき役割は何なのかということは非常に鋭く問われていると思います。そういう時にどういう方向を探っていくのかという点に関して、なかなかよい答えを出すことができません。『古代哲学研究』とか『ヘーゲル哲学研究』とか、ある特定の領域の雑誌とは違った、特色ある雑誌の編成を考えていかなければならないというのはもちろんですが、ただ、創刊期の頃のように月刊であれば、新しい動向に対応したり、ひんぱんに特集を組むとか、いろいろな意味でももしろい企画を立てることができると思うのですが、今は年一回でするので非常に動きが遅いということは否めません。そういう中でどういう特色が出せるのか、私も編集委員であったときには大いに悩みました。『哲学研究』では、創刊以来、旧哲学科の中に

入っていた講座——例えば心理学や社会学なども入っています——の人たちにも委員に加わっていただいて、学問の垣根を超えた編集をするということをやってきましたし、これからもやっていくことになると思います。また先ほども出ましたけれども、いま話題になっているテーマで特集を組むといった形で存在意義を探っていくということになるかと思いますが。そういう試みをしてはいますが、他の雑誌や紀要などにはない特徴をどういうふうに出していくのか、そのことについては試行錯誤が続くかと思っています。

嶺 藤田さん、現在、会員制度で会費を取って運営しているという状況だということは聞いたことがあるのですが、昔から本当にそうでしたか。例えば発刊された当時どこから費用が出ていたのですか。その会員というのは現在であれば京都大学の文学研究科の教員が会員で、どのくらいの範囲まで広がっているかどうか。かつて本当にそうでしたか。少なくとも私が学生だった頃、会員になれと言われたことは一度もありませんし、払ったこともないです。

藤田 私と同じころだと思えますが、私は会費払っていますよ（一同笑い）。

嶺 それは私より一年以上ですけれど同じころだと思えますが、払えと言われたこともなければ払ったこともない。

藤田 創刊期については私も確実なことを申し上げられませんが、おそらく最初の頃から大学の予算によってではな

く、会員が出した会費によって運営がなされていたと思います。戦争中は会員が減少して経営が苦しくなったという話は聞いたことがあります。創刊期の頃がどうなっていたのかに關しては確認してみます。

上原 『哲学研究』創刊号の「京都哲学会規則」を見ると、会費は「年貳圓貳拾錢、前後前期二分テ前納スベキモノトス」と明記されています。それから、五五〇記念号の中で、長尾さんという仏教学の方が、予算の危機に陥ったことを書かれています。ですから大学から一定の予算がいつも出ていたわけではないと思います。これは昭和三年頃のようにして、他にも、中井正一が予算面でいい案を出したといった記載もありましたので、かなり早い時期から会費を集めていたのではないかと思えます。というのは、ページ数をとても気にしていたので、限られた予算の中で運営していたと考えられるからです。今はご存知の通り、基本的に会費で運営しております。私は会計も担当しましたし、現在は会の代表で、編集の担当者ですので、事情は理解しています。藤田先生は年一回と仰いましたが、実際は、投稿数は不十分ですが年二回頑張つて刊行しないといけない状況が続いています。創文社が解散しましたので、二〇一七年の六百一号から、替わつて京都大学学術出版会が発行しています。刊行が遅れ気味になると催促が来ます。「書店から問い合わせがきているのですが、いつ出せますか」と言われ、恐縮しながら編集作業を

しています。会員が激減しているというのではありませんが、増えているわけでもないので、委員同士は会員を増やしたいと希望しています。増やすための一つの方法は、若い方に入会していただくことでして、そこで私が提案したいのは学割制度です。ただ学割を提案すると、ご退職なさつた方の割引はどうするかという話が出てきて、今、まだ割引制度について具体案はできておりません。今のところ、大学院生やODの論文を積極的に掲載しようというよりも、従来通り、教員である研究者の方の良い論文を掲載するという傾向にあるかと思えます。時代が求めるものや学術的な状況の変化に合わせて、『哲学研究』の理念も新しくしていかなければならないという自覚が、運営に携わる会員にはあると感じています。また明確なものとはなっていない。転換期にあるのだと言えます。変化の一つは、雑誌の電子化です。予定としては今年度中に、『哲学研究』創刊号からの一部の電子化が完了し、リポジトリのフリーアクセスが可能となります。そうすると京都大学の文理双方の分野の紀要と同様に、国内は言うまでもなく、海外からでもフリーアクセスでお読みいただけるようになります。別のことをもう一点。実は、大学の組織と京都哲学会が明確に分かれていない時期もあつたようです。西洋史読書会と東洋史研究会についても、同じ事情だつたと理解しています。しかし、いずれの会も大学からは独立した学会です。話を戻します。古いナンバーから順

に電子化が進みますので、これを機に、今は衰えてしまったこの雑誌のかつてのような学術的勢いが、回復に向かってくればと、内心、期待しています。できるだけ多くの方にフリーアクセスで電子版を読んでもらいたいようにしたいと、私は願っています。これが『哲学研究』復活の第一歩となればいいのですが。さて、他にご質問はありませんでしょうか。

そろそろ終了させていただかなければならない時間になりました。これもちまして、本日の座談会を終わりにいたします。先生方、オーデイエンスの皆さま、ありがとうございます。

*鈴木泉教授のご発言内容に関する詳細は、以下のURLで
ご参照頂けます。

<http://www1.u-tokyo.ac.jp/philosophy/seika.html>